

---

## 【特集：『意味の論理学』を本質変形する】

### 導入——『意味の論理学』の地図作成

小倉 拓也

---

#### はじめに

2019年は、ジル・ドゥルーズの『意味の論理学』（1969年）刊行50年にあたる年だった。日本では、1987年に法政大学出版局より岡田弘と宇波彰による翻訳が、2007年に河出文庫より小泉義之による翻訳が刊行されており、とりわけ後者の刊行以降、『意味の論理学』をめぐる研究、『意味の論理学』に触発された思考が、それ以前に比して盛んに展開されるようになったように見受けられる。『意味の論理学』で展開されている様々なテーマ（意味、出来事、身体、etc.）、そしてそれらの哲学的（ストア派、ライプニッツ、ニーチェ、etc.）、文学的（キャロル、ルーセル、アルトー、etc.）、言語学的（ソシュール、バンヴェニスト、ギョーム、etc.）、精神分析的（フロイト、ラカン、クライン、etc.）な文脈あるいは星座は、そのポテンシャルを消尽することなく、むしろ絶えず再形成しながら、今日に至るまで私たちの思考を突き動かし続けていると言えるだろう

本特集は、2019年12月7日（土）に慶應義塾大学で開催された『意味の論理学』刊行50周年記念特別企画「『意味の論理学』を本質変形する」にもとづくものである。この企画は、『意味の論理学』をめぐる研究や思考の展開の現在地点を測定し、その先へ進むことを目指したものである。企画では、小倉拓也による導入、内藤慧と平田公威の研究発表、江川隆男の講演、そして全体討議が行われた。多数の参加者を迎えることができ、会場は超満員、質疑応答も活発に行われ、企画は盛況となった。以下では、企画と同様、まずは特集の導入として、『意味の論理学』についての簡単な地図作成を行うことにしたい。もちろんそれが、後続する各論文と読者によって、捻じ曲げられ、変形されることを期待して。

#### 1. 位置づけ

『意味の論理学』は、国家博士号請求主論文である『差異と反復』（1968年）と同時期の著作であり、特定の哲学者や作家をめぐるモノグラフではなく、むしろそれらの成果が動員され総合された書物であること、そして、後に展開するフェリックス・ガタリとの協働作業以前の仕事であることから、ドゥルーズ独自の優

れて「哲学的な」仕事の代表作のひとつと目されてきた。内容の面においても、潜在性の存在論、超越論的経験論、それらを強くインスパイアしている同時代の構造主義への哲学的応答といった、しばしばドゥルーズ哲学がそれによって形容され、代表される問題構成において、主著『差異と反復』と共通する部分が多い。また、構造主義を「時代の精神」<sup>(1)</sup>、「新たな超越論的哲学」<sup>(2)</sup>と規定する、1967年執筆の論文「何を構造主義として認めるか」（1972年）と記述上オーバーラップする部分が多いことも、『意味の論理学』が同様の問題構成を有することを示している。このように、『意味の論理学』は、ドゥルーズが哲学史や個々の作家に関するモノグラフ的研究を積み重ねながらおのれ自身の体系的な哲学を構築し展開した<sup>(3)</sup>、1960年代の仕事の重要な一部を構成しているのである。

#### 2. 否定的な評価や処遇

しかしながら、それにもかかわらず『意味の論理学』はドゥルーズの仕事のなかで評価が難しい一冊とされ、ときに「黙殺」<sup>(4)</sup>されてきた。鈴木泉も「呪われた書物、孤独な書物」<sup>(5)</sup>と評するように、『意味の論理学』はドゥルーズ研究およびドゥルーズをめぐる言説のなかで、例外的とも言うていほど否定的に評価され、処遇されてきたと言える。その表向きの理由としては、次の二点をあげることができるだろう。

第一に、『意味の論理学』は、形式面において体系的な章立てを行っていない、やや特殊な構成を有している。それは、収束することのない34本の短いセリーと、古代哲学と現代文学に関する5本の補論から構成されており、その理路を首尾一貫した仕方で辿るのは容易ではない。そして、このような構成を、ドゥルーズは意図的に、ある意味でパフォーマンスに行っているふしがある。というのも、特権的なセリーがなく、セリーが収束せずに発散し、それらのあいだに出来事として意味が浮かび上がるという論理こそ、まさに『意味の論理学』で探究される「意味の論理」そのものだからである。つまりドゥルーズは、書物のなかで探究され解明される意味の論理を、当の書物の構成において実演してみせているとみなすことができるのである。これを体系的な仕方

で読み解くのは難解を極める作業となるだろう。

第二に、『意味の論理学』は精神分析を肯定的に援用している。単に援用しているどころか、ドゥルーズ自身がこの書物を「論理学のおよび精神分析的なロマンの試み」<sup>(6)</sup>と規定している。よく知られているように、後にドゥルーズはガタリとともに、精神分析を厳しく批判する内容を含み、世界的に大きな反響を巻き起こした『アンチ・オイディプス』(1972年)を上梓しており、その観点から『意味の論理学』を「いまだ精神分析に対する無邪気で恥ずべき迎合を示していた」<sup>(7)</sup>と自己批判しているのである。とりわけ、『意味の論理学』において、意味の論理の核心部分に位置づけられるセリーの発散の契機が、精神分析的な去勢を介した非物体的な幻想の発生の契機と重ねられていることに鑑みれば、『アンチ・オイディプス』の観点からの自己批判は、単に精神分析に賛成するか否かの問題ではなく、自身の意味の論理の理解、あるいはその問題構成そのものに関わっているとさえ言える。このような事情から、『意味の論理学』は、後に明示的に放棄されたいわゆる「黒歴史」的な試みとみなされてしまう傾向があったと言える<sup>(8)</sup>。

### 3. 後の仕事との関係

しかし、『意味の論理学』の試みが後に完全に放棄されたかという点、必ずしもそうではない。むしろ、そこでは、ドゥルーズの後の仕事との関係から見てもきわめて重要な議論や概念が提出されているのである。ここでは、そのいくつかを書き出してみよう。

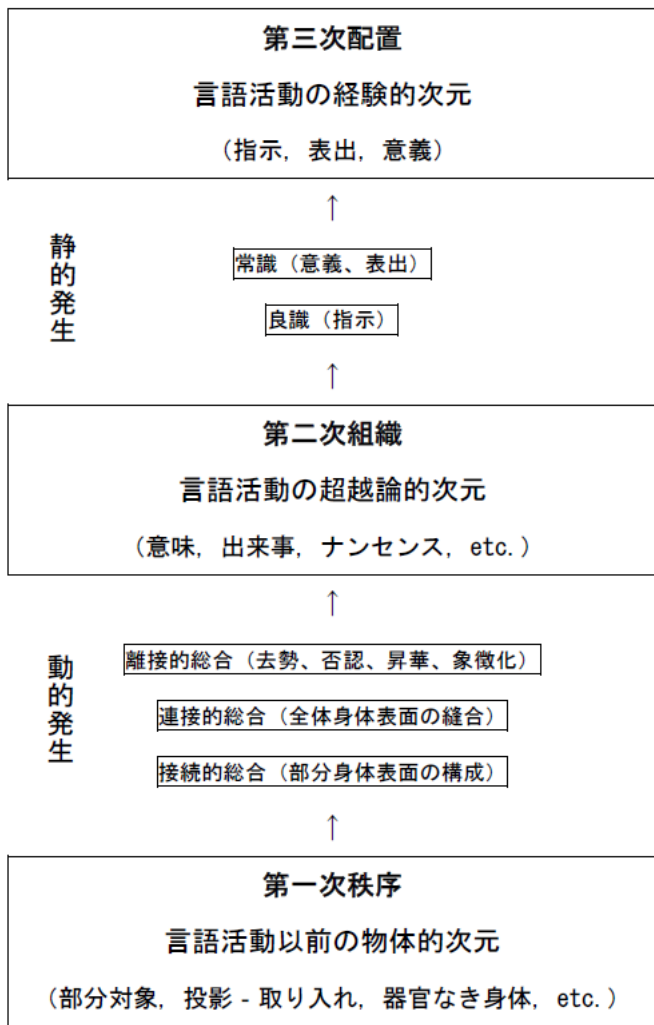
ドゥルーズは『意味の論理学』で、ストアの二元論に由来する「物的なもの」と「非物的なもの」の二元性を提示し、物的なものには還元されない非物的なものの存在論的身分——その「優位」——を論じている。その際ドゥルーズは、それを形象化するものとして、ルイス・キャロルにおける猫本体が消えても存続する「猫の微笑み」を引き合いに出している。物的なものには還元されない非物的なものの存在論的身分、そしてその形象としての「微笑み」は、ドゥルーズが最晩年まで繰り返し用いるものである。例えば、後期の仕事に位置づけられるフランシス・ベーコン論『感覚の論理学』(1981年)では、論究されるべき感覚の概念の一例として、「身体の消滅の後にやってくるだろうと感ぜられる」ものとしての、ベーコンの絵画の「ヒステリー

性の微笑み」<sup>(9)</sup>が引き合いに出されるが、ドゥルーズはこれを、まさにキャロルの「猫の微笑み」と重ね合わせている<sup>(10)</sup>。この議論は、晩年の『哲学とは何か』(1991年)における、「感覚」がその支持材に還元されずに存続する権利上の身分を持つという芸術作品論とも通底している。そこで、そのような感覚の例として言及されるのは、キャンバスに描かれた「若者の微笑み」<sup>(11)</sup>なのである。今後書かれるはずの、ドゥルーズにおける「微笑み」(sourire)の問題は、このように『意味の論理学』で大々的に展開される物的なものとの非物的なものとの二元性の問題系に位置づけることができるのである。

いくつかの主要概念についても、『意味の論理学』をひとつの重要な源泉としている。例えば、『アンチ・オイディプス』や『千のプラトー』(1980年)など、精神分析に批判的な中期の仕事で大々的に展開される「器官なき身体」の概念は、登場するたびにその内実を大きく変えていく難解な概念だが、それがはじめて案出され、提出されるのは、『意味の論理学』のアントナン・アルトール論である<sup>(12)</sup>。同様に、『アンチ・オイディプス』や『千のプラトー』では、構造主義的な構造概念に取って代わるものとして「機械」概念が前景化されるが、それは『意味の論理学』においてすでに構造概念との関係のなかで——構造＝機械という等式のもとではあるが——萌芽的に提示されている<sup>(13)</sup>。また、ドゥルーズ最後の著作となる文学論集『批評と臨床』(1993年)のタイトルを構成する「批評」と「臨床」は、他の著作でも断片的に触れられてはいるが、それらの本格的な定義が試みられているのはやはり『意味の論理学』である<sup>(14)</sup>。もちろん、時期や文脈によるこれらの内実の異同を解明することも肝要だが、それらが、後に厳しく自己批判される『意味の論理学』をひとつの震源としているということ、そして『意味の論理学』がなければ後にも存在しえなかつただろうということは強調されるべきである。

### 4. 内容の図式化

ここからは、『意味の論理学』の内側について見ていこう。以下に、ジョー・ヒューズによる『意味の論理学』の図式化<sup>(15)</sup>に、若干の変更を加えたものを提示しておく。網羅的な図式化ではないが、『意味の論理学』の基本構造をうかがい知るには有益なはずである。



『意味の論理学』は、何よりもまず、言語活動の経験的次元から、その超越論的形態を峻別し、後者の領野の論理と構造を探究するものだと言える（第三次配置-第二次組織）。このとき、言語活動の経験的次元を特徴づけるのが「指示」、「表出」、「意義」である。これらはそれぞれ、個体化された事物の状態、人称的な主体性や意図、一般概念に関わっている。これに対して、言語活動の超越論的形態は「意味」と規定される。経験的次元が、個体化されたもの、人称的なもの、一般的なものに関わるのに対して、超越論的形態である意味は、一見してそれらの否定態を文字どおりに示すように、「前個体的」で「非人称的」な「特異性」に関わるとされる。それは、対応する現実も、主体性や意図も、文法的・論理的な無矛盾性もいまだない、いわばそれらによって汚染されていない、純粹言語活動の領野において生起する「出来事」である。それゆえドゥルーズは、出来事としての意味を論じる際に、具体的文脈によって限定されない（例えば、帰属する主語による活用や、能動や受動といった状態を持たない）動詞の不定法や、キャロル、ジェイムズ・ジョイス、レーモン・ルーセルなどのナンセンス文学の類を引き合いに出すのである。精神分析的な無意識がここに重ねられるのも、それゆえ当然のことだと言える

う。そして、このような物理的実在やそれに固有の論理とは混同されることのない、その表面上で展開される領野が、非物的な「表面」と名指される。その上で、第二次組織から第三次配置への発生が、「静的発生」論として探究されていくことになる。

次いで、『意味の論理学』は、そのような超越論的次元が、言語活動以前の物的＝身体的な次元から発生する論理と機制の探究へと進む（第二次組織-第一次秩序）。この物的＝身体的な次元は、指示、表出、意義からも、さらには意味からも区別される、まったく無意味の領域である。注意しなければならないのは、この無意味が、表面の意味について引き合いに出されたキャロルのナンセンスとはまったく異なるものであり、むしろ、その文学的形象がアントナン・アルトーの「叫び」に見いだされるものだというのである。このような、言語活動の経験的次元からすればいずれも括弧つきの意味で「異常」と言いうるような二つの形態を、さらに本性の差異にしたがい分割することを、ドゥルーズは「批評」と「臨床」の問題だと言う。キャロルとアルトーの差異は、文学的にはナンセンスとまったく無意味の差異であり、それと並行して、精神分析的には倒錯とスキゾフレニアの差異であり、これらを明確に鑑別しなければならないのである。こうして析出されるスキゾフレニア的な物的＝身体的な無意味の次元を、ドゥルーズは表面に対して「深層」と呼ぶ。そして、この深層の世界が、メラニー・クラインの理論における、現実と幻想が混淆した幼児の部分対象の世界と重ねられ、そこから出発して、全体身体表面、全能的な内面性を構成しようとして、しかしそれに失敗することで、現実と幻想のセリーが分岐し、非物的なものの領野が開かれるまでのプロセスが、今度は「動的発生」論として探究されていくことになる。

このように、『意味の論理学』は、言語活動の経験的次元である第三次配置、その超越論的次元である第二次組織、そしてそのいずれからも区別される物的＝身体的な無意味の領域である第一次秩序という、三つの領域を峻別、提示し、それらの関係を探究する批評的で臨床的な超越論的哲学の企図だと言える。ドゥルーズは、これら三つの領域とその関係を、ストア派に由来する物的なものとの非物的なものとの二元論、そして、イデアと内的関係を有する存在者といかなる関係も有さないシミュラクルをめぐるプラトンの分割をとおしてトポグラフィ化しているが、ここでこれ以上その複雑な内実について紹介する余裕はない<sup>(16)</sup>。後続する各論文に、そしてそれらと合わせて読者諸氏の思考にまかせたい。

## おわりに

以上、導入として『意味の論理学』のささやかな地図作成を行っ

た。しかし、ドゥルーズとガタリが言うように、地図作成が単なる「複写」ではありえず、絶えず引き裂かれ、裏返され、変形されることを必要とする以上<sup>(17)</sup>、この導入が言葉の真の意味で地

図作成たりうるためには、後続する各論文によって引き裂かれ、裏返され、変形されなければならない。地図作成の終わりは、その都度つねに、はじまりでしかないのである。

---

注

1. Gilles Deleuze, « A quoi reconnaît-on le structuralisme ? », in *L'île déserte. Textes et entretiens 1953-1974*, Minuit, 2002, p. 239. (ジル・ドゥルーズ「何を構造主義として認めるか」小泉義之訳、『無人島 1969-1974』小泉義之監修、稲村真実ほか訳、河出書房新社、2003年、60頁)
2. *Ibid.*, p. 244. (同書 67頁)
3. 『差異と反復』に結実する1960年代のドゥルーズの仕事は、ドゥルーズにとって記念碑的なものだった。「私に熱狂的な感動を与えたヒューム、ニーチェ、ニーチェ、ブルーストを研究した後、『差異と反復』は、私が「哲学すること」を試みた最初の書物となった」。Gilles Deleuze, « Préface à l'édition américaine de *Différence et répétition* », in *Deux régimes de fous. Textes et entretiens 1975-1995*, Minuit, 2003. (ジル・ドゥルーズ『『差異と反復』アメリカ版への序文』江川隆男訳、『狂人の二つの体制 1975-1982』宇野邦一監修、宇野邦一ほか訳、河出書房新社、2004年、157-158頁。)
4. Jean-Jacques Lecercle, "Preface," in *Gilles Deleuze's Logic of Sense: A Critical Introduction and Guide*, Edinburgh University Press, 2008, p. vii.
5. 鈴木泉「ドゥルーズ『意味の論理学』を読む——その内的組合せの解明」、『神戸大学文学部紀要』第27号、神戸大学文学部、2000年、47頁。
6. Gilles Deleuze, *Logique du sens*, Minuit, 1969, p. 7. (ジル・ドゥルーズ『意味の論理学』上、小泉義之訳、河出文庫、2007年、14頁)
7. Gilles Deleuze, « Note pour l'édition italienne de *Logique du sens* », in *Deux régimes de fous, op.cit.*, p. 60 (ジル・ドゥルーズ『『意味の論理学』イタリア語版への覚え書き』宇野邦一訳、『狂人の二つの体制 1975-1982』宇野邦一監修、宇野邦一ほか訳、2004年、87-88頁)
8. スラヴォイ・ジジエクによる露悪的な(?)『アンチ・オイディプス』批判と『意味の論理学』称賛も、読者に後者を敬遠させる一因となったかもしれない。Slavoj Žižek, *Organs without Bodies: On Deleuze and Consequences*, Routledge, 2004, pp. 21-22. (スラヴォイ・ジジエク『身体なき器官』長原豊訳、河出書房新社、2004年、51-52頁)
9. Gilles Deleuze, *Francis Bacon. Logique de la sensation*, Seuil, 2002, p. 34. (ジル・ドゥルーズ『フランス・ベーコン——感覚の論理学』宇野邦一訳、河出書房新社、2016年、44-45頁)
10. *Ibid.*, p. 33-34, n. 21. (同書 45頁、215頁註 21)
11. Gilles Deleuze et Félix Guattari, *Qu'est-ce que la philosophie?*, Minuit, 1991, p. 154. (ジル・ドゥルーズ+フェリックス・ガタリ『哲学とは何か』財津理訳、河出文庫、2010年、274頁)
12. Gilles Deleuze, *Logique du sens, op. cit.*, p. 108. (ジル・ドゥルーズ『意味の論理学』上、前掲書、162頁)
13. *Ibid.*, p. 102. (同書 154頁)
14. *Ibid.*, pp. 88-90. (同書 134-137頁)
15. Joe Hughes, *Deleuze and the Genesis of Representation*, Continuum, 2008, p. 46.
16. そのひとつの解釈は、小倉拓也『カオスに抗する闘い——ドゥルーズ・精神分析・現象学』人文書院、2018年、112頁で提示している。
17. Gilles Deleuze et Félix Guattari, *Mille plateaux. Capitalisme et schizophrénie 2*, Minuit, 1980, p. 20. (ジル・ドゥルーズ+フェリックス・ガタリ『千のプラトー——資本主義と分裂症』上、宇野邦一+小沢秋広+田中敏彦+豊崎光一

+ 守中高明訳、河出文庫、2010年、34頁)

※ 本稿は秋田大学令和元年度秋田大学若手研究者支援事業の支援を受けた研究成果の一部である。